

新学期が始まった四月のある朝、集団登校をしている小学生に出会いました。先頭を歩く上級生が横断歩道で立ち止まると、新しい黄色い帽子をかぶった年生が列に追いつくと小走りに追いかけてきました。

みんなが揃うのを待つて横断歩道を渡り始めた小学生たち。「おはようございます」と言つて先頭の六年生らしき男の子が挨拶をした後、一年生が「おはようございます！」と元氣な声で通つていきました。渡り終えた後、ニコニコと笑いながら友だちとおしゃべりをして歩く一年生の姿を見ながら、「挨拶っていいなあ。なんだか心があつたかくなるし元氣が出るなあ。」と思つたことでした。

職場でも、駐車場から職場に歩いてくる途中、自転車に乗つた中学生が通りすがりに「おはようございます」と挨拶をしてくれ嬉しかったと話が出ていました。人は誰でも、挨拶をしてもらうと気持ちがいい嬉しくなるのではないでしょうか。声をかけてもらうことで、そこにいる自分を認めてもらつてるように思います。

しかし、自分が小学生のころ積極的に挨拶をしていたかというところではなかつたように記憶しています。恥ずかしがり屋で人見知りの私は、

あいさつ

挨拶をされると小さな声で返すのが精一杯だったように思います。今は、社会人となり「礼儀としての挨拶」から「コミュニケーションとしての挨拶」を考えるようになってきました。せっかく挨拶をするのだから小さな声ではもつたない、うつむいて挨拶しても人には聞こえない、自分から元氣な声で挨拶しよう、と考えるようになってきたのです。明るく元氣な声を出すことで、「さあ今日も頑張ろう」と自分も前向きな気持ちになり、一日が始まります。挨拶を続けることで何気ない会話が始まり、親しく話せることも増えました。

「挨拶の挨という字は『開く』という意味であり、拶は『迫る』という意味で、『心を開いて相手に迫ること』なのである」と元アナウンサーの鈴木健二氏が言っています。コミュニケーションの第一歩として、みなさんも「おはよう」から始めてみませんか。

*このシリーズはあなたとあなたの周りにいる人の間に温かなつながりが生まれることを願い、人権について考えるきっかけになることを目的としています。

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

☎ 880・6569